

研修レポート

北海道奥尻町の津波被害後の復興対策 及び避難路等の整備状況について

報告者 八峰町議会議員 山本 優人

1. 視察期日
11月1日～3日

2. 研修地の概要

①奥尻町は、北海道南西海上20kmの日本海に位置する南北27km、東西11km、周囲84km、面積134km²の島である。集落として奥尻地区、青苗地区の2集落が大きく、人口は3160人、世帯数1595世帯で漁業と観光が主力産業となっている。②平成5年7月12日22時17分に60km離れた震源地で震度6強の地震が発生し、青苗地区では2～3分後には5m高の津波が到達、一部地域では23mの高さが確認されている。さらに青苗地区では、火災が発生し、189棟、5.1haが焼失。夜間という時間帯での停電も発生し、島を一周する道が各所で寸断され災害情報の収集や移動に障害があった。青苗地区においては津波被害に火災発生するなど342棟(504棟)68%の被害率、死者・行方不明者107人(1、401人)全人口の8%の被害が集中した。

③被害状況集計表

死者・行方不明者	198名	
被害総額		664.2億円
1 全半壊	525戸	42.2億円
2 一部破損	827戸	6.9億円
3 農業被害	154件	3.2億円
4 水産被害	1,983件	68.7億円
5 林業被害	55件	158.1億円
6 商工業被害	204件	41.3億円
7 漁港・港湾被害	10所	194.7億円
8 海岸・道路被害	234所	126.4億円

④義援金の配分基準
下記表参照

3. 復旧・復興計画

①被災により役場機能が忙殺したため復興計画策定は北海道が主導し、A案全戸高台移転案、B案一部高台移転案が提示されたが住民情報への伝達不足から合意が得られず、「奥尻の復興を考える会」の住民組織が設立され、住民自ら調査を行い町と考える会と共催の説明会で合意された。②市街地整備は「漁業集落環境整備事業」(補助

率50%)により6mの盛土を施し、幅員8mの道路と3mの歩道を配置し、道路沿いに商店・事務所を集積。③漁港には人工地盤を作り津波襲来時には作業岸壁から6mの人工地盤に駆け上がる事が出来るほか、高台に通ずる避難路(42箇所)、ソーラー証明付き非難看板を設置。また、防潮堤には最大高11mと総延長14km(21億円)で囲まれ、河口には震度感応式水門の設置を施した。



人工地盤

④宅地整備は「防災集団移転促進事業」(補助率75%)により高台に設置した。

④義援金配分基準 (単位:万円)

被害区分	項目	単位	支援額	
人的被害	死亡・行方不明		300	
	負傷者	軽傷	1人	10
		中傷 重傷		30 50
住家被害	持家入居者	全壊	400	
		半壊	150	
	借家入居者	全壊	200	
		半壊	100	
	借家所有者	全壊	200	
		半壊	100	
	床上浸水		50	
	一部破損		30	
商工被害	自己所有店舗・工場	全壊	300	
		半壊	150	
	借用店舗・工場	全壊	100	
半壊		50		
	貸与店舗・工場	全壊	150	
		半壊	100	

	項目	金額
収入	日赤から	132.84億円
	北海道から	21.78億円
	奥尻町受付	35.85億円
支出	被害者配偶者	40.09億円
	災害復旧・防災対策費	6.17億円
	復興基金積立て	133.22億円
	その他基金積立て	11.00億円

②義援金を活用して被災者支援事業は73項目を創

①被災した後、役場機能は忙殺されると想像されるが、住民の意向を尊重し十分な説明がなされないと計画案の同意は得られない。②住民の復興に対する考え方は、漁業者、高齢者、商店主、若者層で、海岸部、住宅地、市街地、高台とバラバラな意見となり住民と行政との中間組織が必要であると感じられる。③義援金の使途として総

合体育館(15億円)と後継者人材育成基金(10億円)が使用されたが、義援金の目的から逸脱すると批判がある。④基幹産業の漁業では、出漁していたイカ釣漁船以外ほとんどが流失・大破したが、5トン未満船は自己資金9分の1負担で、5トン以上は自己負担9分の2の負担で購入、またはリース船で調達し、いち早く再開した。⑤震災後の離島者数は5世帯であったが、地理的必要もあり高齢化・過疎化により4500人(平成5年)から3200人(平成23年)に減少し、産業・活性化対策などの強化が必要と思われる。⑥復旧復興に費やしたため役場庁舎、病院施設等が老朽化しているほか、児童数の少ない校舎を復旧して廃校にするなど復興整備計画が十分機能されていない。⑦巨額(860億円)の公的資金が投じられた結果、巨額の公債費、管理費、維持補修費が生じ、人口減が続くと、住民負担は

される。①避難路としての整備はされているが、スロープに行き着く前に階段があるため車椅子では登れない。また、高齢者は階段やスロープが急で危険と感じた。②階段脇には雑草が育ち安心して登れる状況を感じられなかった。③防潮堤は一時的に有効と思われるが、山肌を削って高台を作った方が効果的と思えた。④避難看板はソーラー式で夜間照明が付いているところが一部破損しているところがあるなど設備管理が不十分であった。



なべつる岩の前で記念撮影

視察参加者

須藤 正人
佐藤 克實
見上 政子
柴田 正高
腰山 良悦
山本 優人